

# 夏目漱石『こころ』の授業（2年生現代文）について

荻原 万紀子

## はじめに

2年生現代文領域の定番作品とも言える『こころ』は、掲載教科書にほぼ共通して、先生の「裏切り」からKの自殺に至る箇所が取られている。しかし、そこに描かれている倫理感が必ずしも現代の高校生に通じやすいものではない上に長編のすべてが教科書に載っていないこともあり、授業の扱いは簡単ではない。最近の教科書は、話をわかりやすくするためにか、先生とKの房総旅行も載せている。それによって、たしかに先生がKに「精神的に向上心のない者は馬鹿だ」（先生と遺書41）と言う経緯は理解しやすくなるのだが、却って先生の「罪」が際立つように読まれかねない。『こころ』の魅力は、先生の省察を通して、漱石の時代に限らぬ「自由と独立と己とに満ちた現代に生まれた我々」の「淋しみ」をどう受けとめるかにあると思うが、そのためにはやはり全編を読むことが必要であろう。夏休みに『こころ』全編を読むことを課しても全員がしてくるわけではないが、それにもとづいて取り組む『こころ』の授業は、1994年度から昨年まで4回試みた。今回は、それを通しての報告をしたい。ただ、97年度については教科書に載っていたのが『こころ』ではなく『夢十夜』だったので、生徒の希望により、どちらかを選んでのグループ発表としたので、この時の授業については、特に必要がない限り触れないこととする。

## 授業目標

目標は、『こころ』の世界にどれだけ迫れるかにある。生徒の中には、親友Kを裏切って結婚した上に、奥さんを置いて人生の敗北としての死を選ぶ先生を許しがたいと思い、初読時にはそういう感想を書いている者も少なくない。そのこと自体は勿論かまわないが、少なくとも表面的な理解にとどめずに読み込んだ上で、そういう感想を持ってほしい。そして、内容理解のためには、

- 1 先生が、超然としているKに対して劣等感を感じさせられつつ「堅いなり」（遺書29）の友情しか結ばずにいたこと。
- 2 Kが、どれだけ先生の気持ちを顧みない言動をしていたか、そしてそのことにおそらく最後に気がついたのであろうこと。
- 3 先生が、Kの死後、奥さん（お嬢さん）にそれについて話さなかったのは、なぜか——お嬢さん

が、Kを利用して先生の嫉妬心をあおろうとしたことについて知らせることを肯じなかったためであろうこと（「暗黒な一点を印するに忍びなかったから打ち明けなかったのです」〈遺書52〉）。

- 4 先生は奥さんのために死を思いとどまっていたのであり、それが自殺の決行に及ぶのは、より大きな動機か死の意義付けがなければならないこと。

が、おさえられなければならないだろう。そして、それらを通して、作中の人物たち、ひいては作者自身の孤独を読み取らなければならないだろう。この辺は、私自身の作品理解ともかかわるが、なるべく押し付けにらず、生徒たち自身に気づき、考えてもらいたい。結果的に違う理解が出てくるのは当然であるし、構わないと思っている。

## 夏休みの課題

資料1に94年度、2に00年度のものを示した。94年度にはこのような形で提出させたところ、「疑問に思ったこと」にあまりに瑣末な事柄があがったため、95年度には「3点以内」としたが、今度は積極的な疑問を閉ざすことになる可能性に気づき、97年度には00年度と同じ形にした。その他、97年度と00年度に「この小説で考えてみたいこと」をつけた。「疑問」の中から本質的なものを抽出させたいと考えたのだが、やはり重なることが多く、分ける意味はあまりないかも知れない。また、00年度には「裏にあり」を加え、お嬢さんが好きだったのは先生かKか問うてみた。これについては後述する。なお、図書館等で借りて読み、2学期の授業時には持っていない生徒がいることがわかったので、00年度には、「自分用の1冊を用意して」おく旨明記した。

提出率は9割以上だが、提出した全生徒が作品を通して読んでいるとは限らない。感想や疑問を見ると、教科書に載っている分しか読まずに書いている者もある。実際、00年度には「自分用の1冊」と書いてあるにもかかわらず、「教科書じゃないんですか」と聞いてくる生徒が1人ならずあったから、聞かずに教科書だけですませた者も何人かいたことは十分推測できる。次回は「教科書ではない」ことを太字で書かなければならないかも知れない。

## 課題のまとめ

95年度を資料3、00年度を4に掲げた。『こころ』の授業は、例年、9月に入って約2週間の教育実習とそれに続く詩の授業の後に行うので、9月に提出された課題を整理してプリントにする。95年度は「疑問」を3点にしぼったためと、「同じような内容はまとめてよい」として教育実習生に作成を任せたため、このようにシンプルなものになっている（私自身が作成する時にも同じような内容のものはまとめるのだが、微妙にニュアンスが違ふと思切れずに別立てにしてしまうため、00年度のように量が膨大になる。しかし、後の作業のためにもある程度しぼった方がよいだろう）。

00年度だけは、「お嬢さんが好きだったのは…」以外は最初の授業時に配らなかつた。

## 授業の展開

現代の高校生は、お嬢さんが先生を好きだという明白な事実を案外読み取れない。だが、これを読み誤ると作品の理解が困難になる。そこで、94・95年度は、最初に、お嬢さんが好きだったのはKではなく先生であることを、作品の何箇所かを示しながら明らかにした後、教科書の読解を行った。94年度は、「先生と遺書」の教科書採録部分の谷間にあたる章もプリントし、その箇所は概説をした（95年度は、時間短縮のために口頭で補うだけにした）。この読解中は、先生がKに対してどういう気持ちを持っていたか、先生がお嬢さんへの感情を直接行動に移せなかったのはなぜか、Kはなぜお嬢さんへの気持ちを先生に告げたのか、等について考え、あわせて先生とKの部屋の仕切りの襖の象徴的な意味（越智治雄『漱石私論』）について考えるようにした。この段階では、疑問箇所については大きく扱わなかったが、「精神的に向上」（遺書31）するとはどういうことか、Kの目指した「道」（同19）がどのようなものだったのかは確認しておいた。また、Kの言う「覚悟」（同42）を先生はどのような意味で受け取り、次にどういう意味だと考え直し、遺書を書いている現在、どういう意味だと認識しているか、についても時間をかけて考えた。これによって、少なくとも先生に告白した段階で、Kがある程度自殺の「覚悟」を決めていたことが明らかになり、グループ学習の①につなげることができたかと思う。読解を7時間程度（95年度は6時間）行った後、グループ学習に移った。

00年度は、最初に「お嬢さんが好きだったのは…」に1時間をかけた。後述するように、授業がだいぶ先に進んでも、お嬢さんが好きなのはKだという信念を曲げていない生徒がいた過去の反省から、資料4-2のように課題を整理し、生徒たち自身に結論を出させようと試みたのである（なお蘭・菊・梅はクラス名である）。夏休み中にKや「どちらでもない」を選んだ生徒名は手元に控えておいた。プリントは、作品に書かれている事実を先生派、K派である程度対応するように並べておいた。プリントを読めば明らかなように、「先生」と答えている中でも、明らかな読み間違いがあるが、おおむね先生派の方が恣意的な読み取りでない。読み終えた生徒たちは、その段階で殆どが「先生」と答えた。ただ、3クラス中1名だけが「どちらも好き」という考えを捨てなかった。私はとりあえず説得を試み、それでも意見を変えない場合はそのままにしておこうと思ったのだが、最終的に他の生徒たちからも「先生だ」という発言があり、この生徒は自分の意見に固執するのをやめた。殆ど全生徒の納得を得られたと思うし、その後この問題が蒸し返されることもなかった。しかし、この方法は常に有効とは言えないだろう。この時は、2年間続けて現代文を担当している学年であったために、ある程度気心が知れているという安心感があって行ったもので、孤立感や責められているような思いを持たせない配慮が相当必要であろう。

グループ学習は、他の教材でも行っているが、座席で分け、6班を作り、班長（司会）と書記を決めさせている。グループで考えるべきことは、94・95年度は、

- ①Kはなぜ自殺をしたのか（後年の先生の分析〈遺書53〉を参考として示す）。
- ②先生は、その後どういう気持ちで生きてきたのか（生徒たちの関心事である、なぜ奥さんにKとのこ

とを話さなかったのか、という疑問はここに含め、先生がそれについて語っている箇所〈遺書52・53・56〉を示した)。

③奥さんのために生きてきた先生が、突然、死を選ぶのはなぜか(「明治の精神に殉死する」〈遺書56〉とはどういうことか。Kの自殺と同じなのか違うのか)。

④先生と「私」の関係はどのようなものか。先生はなぜ「私」に遺書を宛てたのか。「私」にとって先生はどのような存在なのか(生徒の疑問である「「私」の出現が先生の自殺と関係あるのか」を含める)。

⑤作品の構成はどのようなものか。「先生と私」「両親と私」は「先生と遺書」の伏線だけなのか。

の5点とし、主題は全班が考えることとした。00年度は、⑤を除いた。

なお、97年度は、『こころ』を選んだ生徒たちに、①～④のどれに重きを置きたいかで、班分けをした。

グループ学習は1、5時間程度をかけた。班の中で意見を無理に統一する必要がないことは伝えている。⑤まで終わらない班もあったが、それでよいこととして順次発表させ(発表の順は項目ごとに変え、いつも1班から始まることはないようにする。また00年度は、多くの生徒に発言させるために、毎回違う生徒が発表するように指示した)、要旨を私が板書した。

6班の理解はさまざまであるが、全班の発表要旨を板書すると、全体として相当作品に深く迫ることができるようである。ことに①については、「失恋のため」「先生への抗議のため」という読み取りはなくなり、「理想と現実の衝突」、あるいはそこから「たった一人でさびしくて仕方がなくなった結果」という理解が教室全体のものとして可能になる。②については、罪悪感と孤独感をかかえながら先生が「妻のために命を引きずって世の中を歩いていた」(遺書55)ことがだいふ読めてくるが、94年度は、この段階でなお「先生(私のこと)はああ言ったけど、やっぱりお嬢さんはKの方が好きだったと思う」と言う者があり、強引な授業展開を反省させられた(そのため95年度は、最初にもう少し丁寧にお嬢さんが先生を好きだったことを説明したが、一方的に与えた感は免れなかった)。③ことに「明治の精神」は、この作品理解で最も困難な要素だろう。生徒たちの話し合いの結果も要領を得ないものになりがちである。「奥さんや世間への言い訳ができた」、あるいは、これはきっかけに過ぎず、本当の理由は、過去を語り未来を託すべき「私」を得たから、という、よりわかりやすい読み方が主流になる。私自身、明確には理解できていない箇所だが、『阿部一族』なども引きながら「殉死」について説明し、それが「自由と独立と己とに満ちた現代」の対極にある価値観であること、そこには孤独はないこと、を語る程度で、あとは生徒の理解に任せている。

④については、「精神的親族」(江藤淳『夏目漱石』)ほかに「精神的親子」〈瀬沼茂樹『夏目漱石』)など。このような見方は石原千秋氏が「『こころ』のオイディプス」で整理されている)であることは多くの生徒が読み取れる。問題は、「私」の存在が先生の自殺にかかわっているかで、かかわっていると見る生徒の方が圧倒的に少ないが、その見方を全面的に否定することは難しいだろう。「私」に過去を

語れたから死ねた、というのはあまりに短絡的であるにしても、「私」が過去を話すよう迫ったことが、先生に死を意識させなかったとは言い切れないからである（遺書2）。だが、遺書に関して「私」との関係でより重要なのは、当初「ただ貴方だけに私の過去を物語りたい」（同）として書き始められた遺書が、終わりには「貴方にとっても外の人にとっても」（同56）と対象を広げていることではないか。これは、孤独の中に生きてきた先生が、「私」という理解者（少なくとも理解を望み得る人物）を得たこともさることながら、彼に向けて遺書を書いているうちに、もっと多くの人との結びつきを望むようになったことを意味している（越智氏前掲書）。それは、先生が生前一時期だけ可能であった「もっと大きな意味からいうと、ついに人間の為」（遺書54）の再現とも言える。先生は、結果的に死を代償にして、おそらく孤独を超えるものを望み見ることができたのであろう。それは、胃を痛めては書くことを続けた漱石の姿と通うものがある。ここまで自主的に読み取らせることは難しく（97年度の1班だけが、「貴方にとっても外の人にとっても」の記述に気がついたが、自分たちだけでは消化できなかった。私が質問して誘導した）、私が語ることになってしまいが、この辺から主題に迫っていくことができると思う。

⑤は、生徒の方から「単なる伏線ではない」という見解が出て、私はその補足をし、『こころ』が新聞連載小説であったことや、本来の構想とは違った形になったものであること等を示している。

00年度は、教科書の読解を行わずに初めからグループ学習を行った。教科書を読解していくことが冗漫に思えたからで、基本的に一度読んであるものである上に、プリントで自分たちが挙げた問題点も整理してあるのだから、即考える学習に入って大丈夫だろうと思ったためである。プリントから大きな問題点は前記①～④と主題がそのまま挙がってくるので、主題を含めて5点を課題とした。ただし発表は一つの問題ごとに行い、単調さを破るため、また考えるヒントを与えるため、そして補足的な話をするために、毎時間最初に、私からの話の時間を10分ほど取った。その中に、構成に関することや、殉死、奥さんを除く主要人物に名がないことなどについての話題も交えた。また、「行き詰まったところ、煮しまったところは私を呼んで」と言っては机間を回っていた。結局時間短縮にはならず、発表も含めて6時間かかり、小説の内容を覚えていない生徒が黙って読んでいる姿もしばしば見られた。その姿を見ながら、あまりよいやり方ではなかったかと思ったが、結果的にそうでもなかったかも知れない（後述）。

## 主題について

94・95年度は、グループ学習と発表、私の補足や解説の後、主題の読み取りにかかり、これは個人作業としてノートにまとめさせた。00年度も、グループで話し合っても、最終的には個人に任せた。小説の主題は一つに絞れるとは限らず、だから自分の読みを大事にするべきであることは、小説を扱うたびに知らせている。『こころ』に関しては、大体、次のパターンに大別される。

・人間のエゴイズム

- ・人間の孤独（さびしさ）
- ・人間の孤独とそれを超える人との結びつき

そこに時代の特殊性を加味するのも正しい読み取りであろう。先生自身が「私」に「あなたにはわからないかもしれない」と再三言っているのだから。

94・00年度には、この後、参考資料として大江健三郎「記憶してください 私はこんな風に生きてきたのです」を配布した。

## 評 価

部分よりも作品全体に迫ったのであるから、通常の読解テストはふさわしくない。そこで、予め題を示した上で（資料5）、資料持ち込みの論述テストにしている。レポートにしてもよいのだが、提出期日を守らない生徒が必ず出るので、一斉に集められるテストにしている。題の設定は、年によって多少変えているが、主題にかかわらせるようする。「エゴイズム」的なものを出してもよいのだが、それだけで終わらせたくないという私の判断（好みと言った方がよいかも知れない）により、それは設定しない。ただ、「他に希望があれば事前に相談に来るように」と伝えてはあるが、そうした生徒は一度も現れない。また、採点・返却に関しては評価項目を明示した採点表（資料6に00年度のもの掲げた）を添付している。テスト前には「どうやって採点するんですか」と言っていた生徒たちも、この採点表を見ると、それなりに納得するらしく、少なくとも苦情が来たことはない（通常の現代文試験では、「これじゃいけないんですか」と言って来る者がしばしばいる。00年度には、「ここが減点されるのはわかるが、どうしたらよかったのか」と尋ねに来た者はある）。もとより満点を与えるつもりで行っているテストだが、なかなかよく作品に迫る生徒が少ない一方、やはり浅い理解にとどまる者もある。ただ、00年度に関しては、単純な罪悪感だけで終える生徒は激減し、満点こそなかったものの、85点を超える者も多かった。ことに、グループの意見を発表する段階で質疑が活発に行われたクラスは平均点も高く、満点に近い者2名（漢字で原点された。資料7に示したのは、それを直して全員に配布したものである）もこのクラスであった。質疑応答によって、理解がクラス全体のものになるので、現代文の教師としては、そのような授業展開を望みたいと思う（ただし、満点が一人もいなかったのはこの年だけである。私自身の評価基準が厳しくなっている面もあるようだが）。

## 終わりに

作品の理解は個人の資質や経験が大きくかわるから、全員に『こころ』に深く迫ること、まして共感を求めることは無理であろう（答案に「深く共感すると全く理解できない人に分かれるだろう」と書いた生徒もいる）。それで構わないと思うが、そういう生徒が少ない方がいいという望みもあるので、00年度の方法を改善して次回に生かすことを考えたい。どういう答案が多いとか少ないとかは、厳密に統計を取ったものではなく印象批評に過ぎないので、正確さに欠け、自己満足に過ぎない面もある

うかと思われる。ただ、生徒たちが、一斉授業よりも自分たち思考を深めていく方を好む傾向があることは事実で、適切な方向性や助言を与えつつ生徒に任せることも必要ではないかと思う。また、この年はグループ討議の発表の段階で、根拠があやふやなものについては、他の生徒や私自身から質問をした。小説を自分の好きなように読むのではなく、根拠に基づいて、そうした意味で論理的に読む、ということも多少はできたのではないかと思う。こうした点を生かしつつ、次回の授業を試みたい。

### 〈参考文献〉

- ・越智治雄『漱石私論』（角川書店1971年6月 『漱石作品論集成』所収）
- ・江藤 淳「『心』——所謂「漱石の微笑」（『決定版夏目漱石』〈新潮社1984年6月〉他）
- ・石原千秋「『こゝろ』のオイディプス——反転する語り——」（『成城国文学』1号 1985年3月 『漱石作品論集成』所収）
- ・『鑑賞日本現代文学』5『夏目漱石』（角川書店1984年3月）
- ・『漱石作品論集成』10『こゝろ』（桜楓社1991年4月）
- ・『国文学』第26巻13号（56年10月号）『漱石「三四郎」と「こゝろ」の世界』（学燈社1981年）

## 夏休みの宿題（現代文） 2年 組 番 氏名

夏目漱石『こころ』を読み、感想と疑問に思ったことを書く。これをしていないと2学期の授業に参加できません。ただし、あまりに細かい（と自分で思う）疑問は書かないように。

〈感想〉

---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---

〈疑問に思ったこと……簡条書きでもよい〉

---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---



---

〈注意〉 ・この紙はなくさないこと。2枚目からは有料です。  
 ・9月1日に週番が出席番号順に集めて持って来ること。



(一部省略)

- ☆3 夏目漱石『こころ』を読んで、右の感想用紙に記入する。  
(『こころ』は、2学期後半の授業で扱うので、読んでおかないと授業に参加できません。  
授業の時には手元に必要なので、借りずに自分用の1冊を用意してください)

2年 組 番 氏名

- ☆3 (1) 『こころ』を読んで感じたこと

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

- (2) 『こころ』を読んで疑問に思ったこと (あまりに細かいことは除く。箇条書きで)

---

---

---

---

---

---

---

---

- (3) この小説で考えてみたいこと (上に挙げたものでもよい)

---

---

---

---

---

---

---

---

- (4) 裏にあり (『こころ』を読み終わってから裏を見ること。読む前を見ると目がつぶれます)

(4) お嬢さんが好きだったのは、先生、Kのどちらだろうか。理由も記すこと。

お嬢さんが好きだったのは\_\_\_\_\_だと思う。  
なぜならば、

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

(簡条書きでもよい)

\_\_\_\_\_だから。

## 先生

「私」に関して

- ・人間嫌いなのに「私」と交流を持ったわけは？
- ・なぜ「私」に過去を打ち明けたのか？
- ・「私」の「真面目」（「先生と私」31・「先生と遺書」2）とは？
- ・「私」の存在の意味は？

Kに関して

- ・Kとの友情のあり方は？
- ・どうしてKにお嬢さんへの思いを語らなかったのか？
- ・Kを傷つけたものは何だったのか？
- ・なぜKに黙って結婚を頼んだのか？  
（策略で勝つとは？）
- ・Kの自殺、遺書を見つけた時の気持ちは？

お嬢さん（奥さん）に関して

- ・なぜ本人でなく母親にプロポーズしたのか？
- ・Kの自殺の経緯を知らせなかったわけは？
- ・先生の中で妻の存在は？

自殺・その他全体を通して

- ・なぜ死んだのか？
- ・「私」に過去を話したことと関係するのか？
- ・Kの死後長い年月が必要だったわけは？
- ・明治天皇や乃木大将の死とどうかかわるのか？
- ・死に対する意識は？
  
- ・なぜ世間に出ることを嫌っていたのか？
- ・「異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いてきたのです」（「先生と私」12）とは？
- ・「黒い長い髪で縛られた時の心持ち」（同）とは？
- ・「恋は罪悪だ」と言い切った時（「先生と私」13）の気持ちは？
- ・幸福をどのように考えていたのだろうか？
- ・先生の言う淋しさ・覚悟（「先生と私」14）とは？
- ・どういう生活をしているのか？最初に出て来た西洋人は？

## K

- ・なぜイニシャルKなのか？
- ・夜中に先生に声をかけるのは？
- ・突然お嬢さんに対する気持ちを打ち明けたわけは？
- ・先生のお嬢さんへの気持ちを知っていたのか？
- ・「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」（「先生と遺書」31）とは？またそれを先生に返された時（同41）の気持ちは？
- ・「覚悟」（同42）の意味は？

- ・「投げ出すことのできないほど尊い過去」(同43)とは？
- ・奥さん(お嬢さんのお母さん)に二人の結婚を告げられた時(同47)の気持ちは？
- ・遺書に関して(同48)
  - 「もっと早く死ぬべきだった」とは？
  - 先生へのつらあてを書かなかったのは？
  - お嬢さんについて触れていないわけは？
- ・自殺の理由に関して
  - なぜ？
  - なぜ心の内を秘めたまま自殺したのか？

### 私

- ・先生に興味を持ち、惹かれるわけは？
- ・なぜ先生と呼ぶのか？
- ・父よりも先生の方が大切だったのか？
- ・「私」の両親はどうなったのか？
- ・「私」の父の死の持つ意味は？
- ・先生の遺書に関して
  - 読んだ時の気持ちは？
  - 先生をその後どうとらえたのか？
  - その後の考え、行動は？

### お嬢さん(奥さん)

- ・Kと先生とどちらが好きだったのか？
- ・Kの自殺についてどう思ったのか？
- ・結婚後の先生をどう見ていたのか？
- ・最後まで何も知らなかったのか？
- ・先生の死後、何を感じ、考えたのだろうか？
- ・魅力なく描かれていないか？

### お嬢さんのお母さん

- ・Kの自殺と娘の結婚とになんらかの因果関係があったことに気づいているのか？
- ・どこまで知っていたのか？

### 構成

- ・三部構成にした意味は？
- ・「私」に宛てた手紙という構成にしたわけは？

### 全体・主題

- ・「明治の精神」、明治天皇・乃木大将の死が持つ意味は？
- ・「こころ」のタイトルが持つ意味は？
- ・なぜ先生は苦しまなければならなかったのか？
- ・人間の生まれながらの罪とは？
- ・登場人物に名前がなく、呼称で書かれているわけは？
- ・主題は？

## 『ころ』

疑問に思ったこと、考えてみたいこと

〈先生〉

- ・先生とはだれか？
- ・なぜ先生は外国人と鎌倉にいるのか。
- ・先生はなぜ鎌倉に海水浴に行ったのか（その後の様子と違う）
- ・初めに先生と海水浴をしていた西洋人は誰なのか。何の意味があって登場したのか。
- ・先生は、なぜ何の仕事もしないで生活できるのか。
- ・先生はなぜ「恋は罪悪ですよ」と言い、また「神聖なものですよ」と付け加えたのか。
- ・なぜ叔父さんは急に裏切ったのか。
- ・親戚にだまされることは、人間の考え方を変えるほどのことなのか。
- ・先生は、Kと妻のどちらが大切だったのか。
- ・先生にとってKはどういう存在だったのか——自分の宿へ連れ込むほどの友だちだったことは確か。
- ・先生はどういうつもりでKを下宿に連れて来たのか。  
いつも劣等感を感じていたKとなぜ一緒に暮らすことにしたのか。
- ・先生は、叔父に対する信頼を失ってから人に対する不信を強くするが、Kに対しては、下宿に呼び込む時になぜ疑わなかったのか。
- ・先生とKは友人なのに、なぜ大切なことの核心を最後まで話し合わなかったのか。
- ・先生とKは本当の友だちだったのか。
- ・先生とKの友情とは？
- ・先生の言う「人間らしい」とはどういうことか。
- ・Kのお嬢さんへの思いを知ってからお嬢さんに結婚申し込みをするまで、先生の心理はどのように動いたのか。
- ・なぜ、親友であるKに、自分もお嬢さんが好きだと言えなかったのか。  
告白せずにKを追窮していったのはなぜか？
- ・もし、先生も自分の気持ちをKに打ち明けていたらどうなったか。
- ・先生はKの「覚悟」ということばをどのように受け取ったのか。
- ・先生は何を失うことがいやだったのか（お嬢さんをKに取られることも嫌だったが、Kをお嬢さんを取られることも嫌がっているように思えた。）
- ・Kという人物がいなくても、先生はお嬢さんと結婚したのか。
- ・親友を裏切って結婚して、先生は幸せになれたのか？
- ・先生の奥さんへの気持ちは本当に愛情だけか。
- ・なぜ先生は、Kの墓参りに一人で行くのか。「運命の冷罵」とは何か。
- ・先生は、なぜKとのことを妻に話さないのか。
- ・先生は、なぜ昔のことを吹っ切って生きられなかったのか。
- ・先生は、過去の罪滅ぼしとして妻の母の看病など“善いこと”をしていたが、実際どうすべきだったのか。
- ・先生が感じた「人間の罪」「恐ろしい影」「物凄い閃き」とは何だったのか。
- ・人間全体を信用しないことに堪えて淋しさを我慢するのはなぜか。
- ・なぜ先生は、苦しみから逃れるために、もう一度人を信じる努力をしなかったのか。
- ・先生は人を信じられぬと信じていても、本当に信じられた人はいなかったのか。
- ・先生は、Kの自殺後の苦悩の日々を死んだように生きてきた。先生にこうさせたものは何だった

たのか。

- ・なぜ罪悪感を十数年も抱きつづけることができたのか。
- ・遺書55の「動く」「進む」とはどういう意味か。
- ・先生は、なぜ自殺したのか。
  - ・Kに対する償いか
  - ・本当に自殺でしか自分の心を救えなかったのか
  - ・K同用にたった一人の死を選んだ？
  - ・自分のために？
  - ・なぜあの段階で突然死を選んだのか？
  - ・軽くはならない苦悩に堪えてきた先生に自殺を選ばせたのは何だったのか
  - ・なぜ明治天皇の死や乃木將軍の殉死と関連するのか
  - ・なぜ「話す時期」が訪れたのか…なぜ、話す自由が、「私」が帰る時まで続かないのか
  - ・「私」に過去を告げるために死んだのか
  - ・なぜ「私」に会う前に死んだのか
- ・先生は、「私」が着く頃にはもう死んでしまっているのか。
- ・「私」の登場は、先生にどういう影響を与えたか。
- ・先生にとっての「私」の存在の意味は？
- ・「私」だけに遺書を送った理由は何か。  
なぜ「私」は、先生にとって信頼できるたった一人として選ばれたのか。  
「私」を真面目な人だと思い、心から信用したのか。
- ・先生は、「私」でも誰でもいいから話を聞いてもらいたかったのか。
- ・先生は、「私」に何を伝えたかったのか。

〈K〉

- ・個性が強いとはいえ、なぜKには友人がいなかったのか。
- ・Kのことを先生は「強い」と言っているが、実際にKは先生より強い男だったのか。何を基準に「強い」とするのか。本当に強いとは、どういうことか。
- ・先生とKが旅した時のKの態度は？
- ・Kはなぜお嬢さんが好きになったのか。  
どんなところに惹かれたのか。
- ・人を愛することを、Kはなぜあんなに嫌がっていたのか。
- ・Kは、先生がお嬢さんを好きだとは気づいていなかったのか。
- ・なぜKは先生に自分の恋を打ち明けてしまったのか。  
もし彼がだまっていたら、その後のお嬢さんと先生とKの関係に変化はあったのか。
- ・なぜKは深い悲しみを背負っていたのか。
- ・Kはどんな信念を持っていたのか。  
Kの言う「道」とは何か。
- ・Kは、先生のお嬢さんへの結婚申し込みを聞いて以後、どのような心理（先生や奥さんやお嬢さんに対して）で自殺にいたったのか。
- ・先生とお嬢さんが結婚することを知ったのに、なぜそのことについて先生と話さなかったのか。
- ・Kは先生のことをどう思っていたのか。恨んだのか。
- ・先生とお嬢さんの結婚を聞いた時のKはどんな気持ちだったのか。
- ・もし先生が、自分のお嬢さんに対する気持ちをKに伝えられていたら、Kは死なずにすんだのか。
- ・先生とお嬢さんが結婚していなかったら、Kは生きていたのか。

- ・なぜKは自殺する直前に、先生の部屋との襖を開けたのか。
- ・Kはなぜ自殺したのか。自殺の本当の理由は何か。
  - ・先生との会話の「覚悟」という言葉は、Kの自殺に影響したのか。
  - ・失恋の悩みだけで自殺したのか。
  - ・なぜ、何も言わずに死んでしまったのか。
    - なぜ自分を裏切った先生を責めることなく（遺書でも触れずに）自殺してしまったのか。
    - なぜ遺書でお嬢さんのことに触れていないのか。
  - ・孤独のために（「たった一人で淋しくて仕方がなくなった結果」）自殺したのか？
  - ・遺書にあった「もっと早く死ぬべきだった」というのは、どういうことか。
- ・自殺する時、先生とお嬢さんにどのような気持ちを持っていたか。

〈私〉

- ・「私」はなぜ「先生」と呼ぶのか。
- ・「私」はKの生まれ変わりではないのか？
- ・「私」と先生の共通点は？
- ・なぜ「私」は先生を「先生」と呼ぶのか。
- ・「私」が鎌倉で先生を目にとめ、目で追うようになったのはなぜか。（一緒にいた西洋人が目をひいたというだけの理由でここまで懇意になるとは思えない）
- ・「私」が先生をどこかで見たことがある気がしたのはなぜか。
- ・なぜ「私」は先生に惹かれたのか？
- ・「私」は先生から学問や思想について学んだはずなのに、どうして小説中では失望をさせられる場面ばかり出てくるのか。
- ・「私」はなぜあんなに先生の秘密（先生の思想の根底にあるもの）を知りたかったのか。
- ・私が先生に求めていたものは何だったのか。
- ・「私」は先生の妻に特別な感情を持っていたのか。
- ・「私」の父は、どうなったのか。
  - なぜ、父の死をはっきりさせないまま終わらせたのか。
- ・「私」は、短い走り書きを残しただけで汽車に飛び乗った時、父のことはどうなってもよかったのか。
- ・「私」にとって父より先生の方が大切だったのか。
- ・田舎者だった「私」が、東京へ出て、先生と会ったからといって、本当の父を他人のように感じてしまうものだろうか。
- ・「私」は何度か先生と父親を比べている。このことが、父親が死ぬかも知れない時に、先生のいる東京へ向かったことと関係しているのだろうか。
- ・列車の中で遺書を読み終えた「私」は、この後どうなる（どうする）のか。
  - ・父の死に目に会えたのか。
  - ・親戚の間で問題は起きなかったのか（財産のことなど）。
  - ・どんなことを思ったか（先生について、思想の変化）
  - ・先生の家は行ったか
  - ・その後も先生の家は通うのか
  - ・遺書を本当に奥さんに見せなかったのか
  - ・奥さんとの交流はどうなるのか
  - ・自殺するのか
  - ・どう生きるのか
  - ・結局財産については、先生の忠告通りきちんと話し合ったのか

- ・先生の鼓動が止まった時に、「私」の胸に宿る新しい命とは何か
- ・先生の「人生そのものから」どのような「生きた教訓」を得たか
- ・続きを考えてみたい
- ・「私」の父親の登場の意味は何か。先生の死と父親の死との対比は？

#### 〈お嬢さん（奥さん）・お母さん〉

- ・お嬢さんのお母さんは、お嬢さんに結婚を申し込んだのが先生だったから応諾したのだろうか。Kではだめだったのか。
- ・お母さんの一存で結婚が決められてしまっていていいのか。
- ・今の奥さん=お嬢さんなの？
- ・なぜお嬢さんの態度は、イライラするほどあやふやなのか。
- ・お嬢さんは、実はすべてを知っていたのか。
- ・お嬢さんは、先生とKの気持ちに気づいていないはずなのに、「先生と私」（19あたり）では、まるでわかっていないようなのは、なぜか。
- ・奥さんは、学生時代とは変わってしまった先生となぜ一緒にいるのか。
- ・奥さんは、どうして先生が昔のことで苦しんでいることに気がつかなかったのか。
- ・奥さんは、先生の自殺をどのように受け取ったか。何も気づかなかったのか
- ・奥さんはその後どうなったのか。どうやって生きていくのか。
- ・奥さんにとって、先生が何に苦しんでいるかがわからずに悩むことと、先生の過去を知って先生と同じように苦しむことと、どちらがよかったのか。
- ・お嬢さんの視点から見ると、このストーリーはどのようなものか。

#### 〈構成〉

- ・上・中・下の話のつながりはどのようなものか。
- ・長い遺書は何のためか。
- ・「両親と私」の章は、『こころ』全体にどういう効果をもたらしているのか。
- ・「私」の両親は、後半には全く登場しなくなるが…。
- ・最後に主人公の「私」が登場しないのはなぜ？
- ・主人公は誰か。前半は「私」、後半は先生の話になっているが。
- ・なぜ、こんなに中途半端に終わるのか。
- ・「先生と遺書」51では先生は妻とKの墓参りに行っているはずなのに、「先生と私」6では「自分の妻」さえまだ連れていったことがない、と言っている。なぜ？

#### 〈主題その他全体〉

- ・明治天皇と乃木大将の死の影響がなぜこんなに大きいのか。
- ・「明治の精神」とは何か。
- ・「精神的に向上心のないものはばかだ」という言葉のこの小説における意味・役割。
- ・先生が言っているように「人間は誰でもいざという間に悪人になる」「恋は罪悪である」「その人の膝の前にひざまずいた気憶が、今度はその人の頭の上に足を乗せさせる」などという言葉は、本当にすべての人にあてはまるのか。



- ・この小説のテーマは何か。
  - ・漱石はなぜこの小説を書こうと思ったか。漱石の思想との関連は？
  - ・先生を通して漱石の示した人間はどのようなものか。
  - ・なぜ登場人物の名前が一人も出てこないのか。
  - ・なぜKも先生も死ぬほど苦しんだのか。
  - ・死をもって先生やKは何を示したかったのか。
  - ・人にとって金や名誉の持つ意味は？
  - ・友情とは？ 愛情とは？
  - ・友人とは何か。
  - ・恋は罪悪か。
  - ・愛する人に対して、人は相手と自分を不幸にしても、自分の暗い部分について話せないものなのか。
  - ・人を好きになった時、どんな行動を取るのか（理性がなくなり自己中心になる、ライバルへの対抗心など）。
  - ・罪は死で償うことができるのか。
  - ・死を乗り越えるということは可能か。
  - ・自分がKあるいは先生だったらどうするか。
- 
- ・なぜ『こころ』という題なのか。
  - ・人の心とは？—— 心の中の動き、光、影
- 
- ・漱石は自分自身類似した経験をしたわけではないのに、なぜこの時代に、こんなに現代社会にありがちな恋愛を描けたのか。
  - ・漱石自身の人生とこの小説は、似たところがないのか。
  - ・自分の体験の中からこの小説が書かれていると思うが、数ある体験の中から、なぜこれが題材になったのか。
  - ・漱石自身の姿がどれほど先生に反映されているのか。
- 
- ・この小説が広く読者を惹きつける理由はどんなことか。
  - ・恋愛のパターンとしては他の作品にもよくあるパターンなのに、なぜこの小説が長い間多くの人々に愛されるのか。
  - ・なぜ盛り上がり欠けるこの小説が「名作」と言われるのか。
- 
- ・先生は「私」に、自分の過去のことを腹の中にしまっておいてほしいと「私」に頼んでいるのに、「私」は先生のことを語っているが…。
- 
- ・なぜ「女だから…」と、女性が自分を卑下した表現が多いのか。
  - ・あの長い手紙は、本当に四折りで半紙で包んだだけで届いたのか。
  - ・下巻の遺書は、各章の最初に「 が つ い て い る が、 終 わ り に は つ い て い な い。 な ぜ ？
  - ・Kの告白を聞いた後でお嬢さんと穏便に（Kの自殺なしに）結婚するうまい方法はあるか？（今後の人生のために）

現代文

『こころ』

お嬢さんが好きだったのは…

## ☆調査結果

|    |   |    |   |    |   |    |   |    |
|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 先生 | 蘭 | 27 | 菊 | 34 | 梅 | 30 | 計 | 91 |
| K  | 蘭 | 4  | 菊 | 5  | 梅 | 6  | 計 | 11 |
| 両方 | 蘭 | 5  | 菊 | 0  | 梅 | 2  | 計 | 5  |

(「どちらでもない」・「わからない」含む)

## ☆なぜならば

<先生派>…Kの気持ちを知っていたか否かについては、意見が分かれる。

- ・先生は、Kに嫉妬しているので、Kやお嬢さんの態度に過剰反応している。
- ・最初に会った時からお互いに好きだったようだ。
- ・下手な花と琴で自分をアピールしている。
- ・先生と話しこんで、お母さんから呼ばれても腰を上げようとしない。
- ・お母さんと3人でお茶しようとする時に、必ずお嬢さんが呼びに来るといふ、積極的な態度を見せているから。
- ・先生の国もとの事情を聞いて泣いている。
- ・先生の反物と自分のを重ねて置いている。
- ・結婚の話になった時の態度（後ろを向いている）は、明らかに先生を意識している。
- ・先生がKを連れて来ようとした時、お母さんが反対したのは、すでにお嬢さんの気持ちを知っており、お嬢さんと先生との間に、少しでも障害になりそうなものを入れたくなかったため。
- ・Kと話していたのは、
  - ・先生にKと話そう頼まれていたため（むしろ先生を喜ばすため）。
  - ・先生のことを聞いていたため。
  - ・先生のことを知りたかったため。
  - ・先生の気を引きたかったため。
 こうした行動はすべて先生にわかるように行われている。  
 Kの部屋で話しこんでいるのは、決まって先生の帰って来る時刻。  
 Kは、恋愛とは無縁の人と信じこんでいたので、安心して、先生に愛されるために利用した。

- ・先生の気持ちもわからなくなってきて、どっちつかずの態度をとった。
- ・Kは友人と思っていたので、普通に話すことができた。
- Kを好きなら、むしろ談笑はできない。
- ・Kもインテリだったので、話していて楽しかった。

↓

先生に見られると、顔を赤くしたり、逃げたりした。

房総旅行の後は、Kの部屋へ行かなくなった。

- ・時々笑うのは、
  - ・先生が好きだから。
  - ・先生が嫉妬しているのがわかるから。
- ・房総旅行から帰って来た時、先生に親切にしている（先生にだけわかるように——K と話す時も、必ず先生に気づかれるようにしている）。  
しばらく離れていたのでさびしかった。

- ・かるた取りの時にKの加勢をしたのは、
  - ・好きな人の味方はしづらい。
  - ・先生の気を引くため。
- ・Kと連れ立って帰って来たのは、本当に途中で会ったに過ぎない。

↓

- ・だから、先生に会ってばつが悪く、赤い顔をした。
- ・Kに隠れるようにして、先生の気を引こうとした。
- ・先生に会って、赤い顔をしたのは、おめかししていたので恥ずかしかったから。

- ・Kが好きだったら、Kの死に堪えられないはず。
  - ・まして他の人と結婚できるはずがない。
  - ・Kが死んだ時の様子は、友人が死んだ時の普通の悲しみ方で、最愛の人が死んだ時のもの（半狂乱になるとか、長い間放心状態になるとか）ではない。
- ・Kが好きだったら、遺書の意味が少しはわかるはず。

#### ・先生と結婚した！

- ・この時代の女性は、求婚に対して、いやと言えなかったかもしれないが、お嬢さんに関しては、いやなことはいやと言いきう。
- ・お母さんが、「本人が不承知のところへ、私があの子をやるはずがない」「本人の意向さえ確かめるに及ばない」と言っている。このお母さんの気質、この親子の関係からすれば、間違いなくお嬢さん自身が先生と結婚したかった。  
その前に、お母さんが、先生とお嬢さんの二人だけにしないのは、二人の気持ちを知っていて危険な状況を作ろうとしなかったから。

Kについては安心していたので、二人だけになっても気にしなかった。

- ・先生と結婚できるのが嬉しく、また恥ずかしかったので、夜、一緒に食事をしようとしなかった。

この時の返事の仕方がいやな感じではない。

そうは言ってもKの気持ちにも気づいていたので、Kに会いたくなかった。

- ・結婚した後、Kの墓参りに行こうと言っている。Kを好きだったら、先生と一緒に行こうとは思わない。

しかも、Kに喜んでもらおうとしている。

もしKを好きなら、先生が連れて行かないなら隠れてでも行っているはず。

- ・お母さんが死んだ時、「これから先頼りにするものは一人しかいない」と言っている。

- ・結婚生活が幸せそうである。

- ・結婚生活の中で、先生を愛し、理解しようとしている。

- ・先生は妻が自分を理解できないと言っているが、それは妻が無理解なためではなく、先生が知らせないようにしているから。

- ・「私」に書生時代から先生を知っているのかと聞かれて薄赤い顔をしたのは、当時から先生が好きだったから。

- ・「俺が死んだら…」と言う先生に「やめてくださいよ」と真剣に言っている。

- ・「私」に対して、「私ほど先生を幸福にできる者はいない」(上17)と言い切っている。

- ・先生も、妻は自分をたった一人の男だと思ってくれている、と言っている。

- ・先生に、「Kさんが生きていたら、あなたもそんなにならなかったでしょう」と言っているのは、彼らの間に起こったことを何も知らなかったことを表している。

- ・「私」に対して、先生が変わった理由について語るところで、

- ・「私の希望するような頼もしい人」という言い方をしている。

- ・先生が変わってしまったのは自分のせいではないかと気にしている。

- ・自分に不満があるなら改めると言っている。

- ・先生のことだけを心配して言っている。

- ・Kの自殺に触れているが、客観的で、かつて好きだった人、という様子が全く見られない。

Kが好きなら、「親友を一人亡くしただけで」などという言い方はできない。

- ・Kの自殺は、自分とは全く関わりないという認識である。

- ・Kの自殺のために先生が変わったのであれば自分の責任ではなくなる、とまで言っている。

- ・お嬢さんが先生を好きでいるという設定で読まない悲しすぎる。

<K派>…Kの出現以前に先生が好きだったか否かについては、見解が分かれる。

- ・遺書はすべて先生の一人称で書かれているので、先生の思い込みであったかも知れないから。
- ・Kの出現以前は、先生に多少気があった。
- ・先生を好きだったようには見えない。
- ・Kの方が女に好かれやすいタイプだから（先生自身がそう言っている）。
- ・Kの優しさや純粹さは、先生にはないものだから。
- ・先生の魅力と取れそうな表現がなかった（「私」にとっての先生の魅力が女性にとっての魅力とは思えない）。
- ・必ず先生のいないところで、二人きりであるから。
- ・Kと話すのが楽しいから、Kと笑いながら話している。自然に笑える。  
息が合っている。
- ・Kと話している時の方が、生き生きして安心しているように思える。先生といると、無理しているところか所々伝わってくる。
- ・Kと二人の場面だと明るくほほえまし感じたが、先生が登場するとがらりと雰囲気を変化するのを感じる。
- ・先生に対して嫌な笑い方をするのは、Kが好きなことの照れ隠し。
- ・房総旅行の後、先生の世話を先にしてKを後回しにしているのは、Kの方が気がおけないほど親しいから。
- ・かるた取りの時、Kに加勢している。
- ・遺書33で、Kの部屋では火鉢の火が燃えていたのに、先生の部屋は火が尽きていた。
- ・Kと連れ立っていたのは、こっそりデートをしていたため。赤い顔をしていたのは、Kと二人でドキドキしていたため。  
夕食の時も、先生の質問に笑うだけではぐらかしていたところもあやしい。
- ・Kが死んだ時、泣いていて他のことはろくにできなかった。
- ・先生と結婚したが、
  - ・先生が直接プロポーズしたのではない。→お母さんに対して断れなかった。
  - ・あまり嬉しそうでない。

だから、その夜の食事に参加しなかった。  
きっと泣いていた。

- ・ Kの墓参りをしようと言っている。
- ・ 先生は妻を墓参りに連れて行こうとしない。←まだ、妻にKを取られると思っている。
- ・ 先生に「Kさんが生きていたら…」と言う。
- ・ 結婚してからはそれなりに幸せに暮らすことはできる。  
その程度には先生もきらいでなかった。
- ・ 明治天皇が死んだ時に先生に殉死でもしたらよい、と言うのは冗談とは言え、実は長年の愛のなさから飛び出した本音。
- ・ 私がKの方が好きだから。

<どちらでもよかった派>

- ・ お嬢さんは、二人の男の反応を楽しんでいた。
- ・ 先生と結婚したのは、先に告白したのが先生だったから。
- ・ 遺書は先生の観点から氏か書かれていないので、お嬢さんは実はKを好きだったとも考えられる。  
当時の女性は、自分で結婚を決められなかった。だが、Kが好きならいくらなんでもKの死後すぐには結婚できなかっただろう。要は、どちらでも先に求婚した方と結婚していた。
- ・ 先生の結婚の申し出を断るでもなく、Kの求愛についても不自然な動きを見せていないから。

## 国語Ⅱ(現代文)期末テストについて (94年)

『ころ』の本文から任意の表現(一文以上)を選んで題にし、『ころ』全体の感想を二六〇〇字以内で書く。

## 〈注意〉

- ・試験に何を持ち込んでもよい。
- ・二二〇〇字を下回らない。
- ・『ころ』の主題から離れない。
- ・原稿用紙を正しく使う。
- ・段落を適切に切る。
- ・誤字、過度なひらがな表記はあつてはならない。

## 〈参考…「任意の表現」が見つからない人のために〉

- ・「人間を愛し得る人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐に入ろうとするものを、手をひろげて抱きしめることのできない人——これが先生であった。」(「先生と私」6)
- ・「私は淋しい人間ですが、ことによるとあなたも淋しい人間じゃないですか。」(「先生と私」7)
- ・「やっただんです。やっただ後で驚いたんです。そうして非常に怖くなつたんです。」(「先生と私」14)
- ・「自由と独立と己れとに満ちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう。」(「先生と私」14)
- ・「平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なん。それが、いざという間に、急に悪人に変わるんだから恐ろしいのです。だから油断ができません。」(「先生と私」28)
- ・「私は死ぬ前にたった一人だけいから、人を信用して死にたいと思っている。」(「先生と私」31)
- ・「私は人間をはかないものに観じた。人間のどうすることもできない持つて生まれた軽薄を、はかないものに観じた。」(「先生と私」36)
- ・「それでも私はついに私を忘れることができませんでした。」(「先生と遺書」48)
- ・「つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔の口を開かしたのです。」(「先生と遺書」49)
- ・「私は寂寞でした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のしたこともよくありました。」(「先生と遺書」53)
- ・「これは病人自身のためでもありますし、また愛する妻のためでもありましたが、もつと大きな意味からいうと、ついに人間のためでした。」(「先生と遺書」54)
- ・「私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。」(「先生と遺書」54)
- ・「妻の冗談を聞いて初めてそれを思い出した時、私は妻に向かつてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。」(「先生と遺書」56)
- ・「私を生んだ私の過去は、人間の一部分として、私よりほかに誰も語り得るものはないのですから、それを偽りなく書き残しておく私の努力は、人間を知る上において、あなたにとつても、ほかの人にとつても、徒労ではなからうと思います。」(「先生と遺書」56)

## 『こころ』レポート（現代文期末テスト）について（95年）

### 1 次の中から題を選ぶ。

- ・自由と独立と己とに満ちた現代
- ・人生の孤独
- ・さびしい人間
- ・個人を超えるもの

### 2 内容

選んだ題に沿った自分の考え。ただし『こころ』の主題から離れないこと。  
書きにくければ『こころ』の感想文になってもよい。

### 3 注意

- ・一〇〇〇〜一二〇〇字程度で書く。
- ・原稿用紙を正しく使う。
- ・段落を適切に切る。
- ・誤字、過度なひらがな表記はあってはならない。



二年生現代文 二学期末テスト (00年)

題と注意事項

題 「『こころ』論」として、副題を次の中から選ぶ

- 1 明治の精神
- 2 自由と独立と己とに満ちた現代
- 3 さびしい (淋しい・寂しい) 人間
- 4 人の心をつなぐもの (こと)
- 5 孤独を超えるもの

例 1を選ぶと、あなたの題は

「『こころ』論——明治の精神——」 となります。

注意事項

- 1 字数は、一二〇〇字以上一六〇〇字以内とする。
- 2 適宜段落を切る。
- 3 本の解説等他者の見解を自分の意見として書かない。  
引用する場合は、その旨明記する。
- 4 誤字や不適切なひらがな表記をしない。  
その他、日本語を正しく使う。
- 5 原稿用紙を正しく使う。
- 6 乱雑な字で書かない。
- 7 持ち込みは自由とする。

『『こころ』論』採点表

| 項 目      | 配 点 | 得 点 |
|----------|-----|-----|
| 全 体      | 100 |     |
| 作品の読みこみ  | 30  |     |
| 論理性      | 20  |     |
| 構成       | 10  |     |
| 副題との整合性  | 5   |     |
| 表現全体     | 5   |     |
| 語句・語彙    | 5   |     |
| 漢字       | 5   |     |
| 句読点      | 5   |     |
| 原稿用紙の使い方 | 5   |     |
| 字数       | 5   |     |
| 字の丁寧さ    | 5   |     |

『こころ』論——自由と独立と己れとに満ちた現代

「……自由と独立と己れとに満ちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」(『こころ』「先生と私」)

これは、『こころ』の「先生と私」十四の部分で「教授の意見よりも先生の思想の方が有難い」とのぼせた「私」に「先生」がかけた言葉である。「先生」は、この前の部分で、自分の犯した罪を「かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさせようとする」という形で暗示した上で、「私」にこの言葉をかけたのだった。

しかし、ここで一つの疑問が生まれる。この「自由と独立と己れとに満ちた現代」とは一体何なのか、という疑問である。時は明治時代、幕府が倒れ、天皇の名の下に新政府が成立し、日本の近代化を推し進めた時代である。が、それは同時に、古い時代の意識、すなわち江戸時代の思想や社会の形式の影を引きずっている時代でもあった。その明治の日本について、漱石は、

「……現代日本の社会状態は……目下非常な勢いで変化しつつある……だから今日の社会状態と、二十年前、三十年前の社会とは、大変趣きが違っているとすれば、それを統一する形式と云ふのも、自然ズレて来なければならない。」(講演『中身と形式』)

と、述べている。つまり、在来の型をそのまま押しつけるような社会であってはならないのだと言っているのだ。講演では更に、社会が在来の型を押しつけるようなものなら「生活の内面によって自分自身の型を造ろうとする人」は、この押しつけに反抗するので「相手の内面に触れる」ような新しい型で接してやらなくてはならない、とある。ここまで読むと『こころ』の「先生」は、このタイプの人間だと分かる。つまり、彼は時代の落とし子、すなわち「己」の価値と、その「自由と独立」を主張する者——これを個人主義者という——だったのである。しかし、そのことは、若くて未熟な頃の彼にとって、悲劇でもあった。「先生」の「内面に触れる」ような人物が「私」の登場以前には存在しなかったからである。そして、若い「先生」は、自らの崇高な個人主義を、一時的にとは言え、利己主義としての個人主義にまで

墮落させてしまう。その結果、かつて利己主義としての個人主義から「先生」を欺き、財を成した「叔父」を憎みつつ、自らも利己主義者としての個人主義から、友人である「K」を欺き、出し抜いて、遂に恋人を得るという行為を「遭った」。しかし、その後、先生は自らの崇高な個人主義ゆえに、地獄を見てしまうのであった。「先生」は、利己主義に徹しきれなかったために、個人主義の思想の歪みを目のあたりにしてしまっただのである。また、その歪みの前には人間の理性など無力であるということにも気づいてしまった。そこから「自分を呪い、そうした流れを「ひどく怖れた」のである。

残念なことに「先生」の予感は的中した。大正以後、日本はまず国家規模で利己主義になってしまった。戦争である。そして、戦争が終わると、今度は個人規模で利己主義になってしまった。今の世を見よう。「自由」を勝手気ままと誤解した私たちは、自分が可愛い。そして他人を見ない。しかし、人間、他人を見ないと、自分も見えないものだ。おかげで私たちは、あるはずの「淋しみ」が分からない。しかし、心のどこかで「淋し」くて、それを群れることで紛らわす。こうして「独立」と「己れ」は消えてしまった。今の世に残ったのは利己主義だけだ。「自由と独立と己れとに満ちた現代」など、どこにあるのか。

「自由と独立と己れとに満ちた現代」というのは、「先生」の生きた時代のことなのである。そして、それは同時に私たちの目指す本来の姿でもあるのだ。

## 『こころ』論——孤独を超えるもの

現代人は多くのしがらみから開放され、自由と独立を得ることができた。しかし、その代償として、彼等は孤独というものを背負うことになった。それは例えばKのように、家に縛られない代わりに故郷を失うことでもある。しかし人間は、そうした孤独の存在を認識し、受け止めることができないものなのである。『こころ』の中には、そうした前提があるようだ。

『こころ』の中で先生の他者への接し方は変化している。

- ・ 叔父との人を何の疑いもなく信頼する関係
- ・ Kとの相手より自己を優先した関係
- ・ 妻に対する決して相手を汚さない関係
- ・ 「私」との一步隔てた、人の心にどっぴりと漬からない関係

このうち唯一希望が持てたのは「私」とのものだろう。その証拠に、先生は「私」に過去をすべて語ることができた。叔父、Kとは人の心の距離があまりにも近かった。前者は自分から、後者は相手からの接近であったが、どちらも結果的に先生の心を傷つけた。それとは対照的に妻との心の距離は離れすぎていた。だからお互いを癒すことができなかつた。

私は以前、人の心はハリネズミに例えられると聞いたことがある。ハリネズミは寒いと群をなす。ところがあまり近付きすぎると、彼等は各々のとげでお互いを傷つけてしまう。かと言って離れすぎるとは体を温めることができない。彼らには生きるために、ある一定の距離が必要なのだ。

先生は孤独から逃れたいと考えている。しかし、人と人との心にもある一定の距離は必要であるし、実際入り込もうとしても、そうできないのである。

Kと先生の死は、自殺という共通点はあるが、大きく異なっている。遺書にKは、「もっと早く死ぬべきだのに何故今まで生きていたのだろう」と書いた。また、先生は、「私の過去を善悪ともに他の参考に供するつもりです」と書いている。Kは自分の人生を否定しているのに対し、先生は自分の人生を肯定している。この違いが、孤独を抱えた死、つまり人生の敗北であったかどうかを左右していると考えられる。

Kと先生、二人が孤独の中で生きてきたのは、明らかである。その中で先生はなぜそれから脱して、自分の人生を認めることができたのだろう。それこそ、遺書ではないだろうか。先生は「私」との会話で、自分の思想、過去を学びたいとする人がいることを知る。それゆえ先生は自分の過去を遺書に書いたが、それは単に「私」のためだけではなく、自分の遺書が人の役に立つことを確認したからである。それはつまり、自分の人生には意味があったと、自分で納得できたということである。

『こころ』の中で、孤独な先生を癒してくれる人間は出てこない。唯一それができたのは、先生自身が書いた遺書であり、すなわち自分であったように思う。

私は、孤独を超えるものとは、自分の人生に意味を見出すことではないかと考える。先生は遺書を書く中で、自分の人生の意味を発見した。

しかし先生の人生は、果たして幸せだったのだろうか。それはよくわからない。孤独を乗り越えたことは、人生に勝利したことを意味するのかもしれない。だが、それだけで幸福とは言えないのではないか。なぜなら先生は孤独への答えに迎える前に、数知れない淋しさを味わっているからだ。

「私は淋しい人間です」

これはいつか先生が言った言葉である。先生が長い間感じてきた淋しさと、そうして得られた答えを天秤にかけたら、一体どちらに傾くであろうか。そう考えると、

“孤独は決して切り離すことができない”

という人生の常が隠されているようでもある。

漱石も自身の考えを作品に表すことで、自分の人生の意味を確認していたに違いない。